

令和2年度



# 鹿児島県の教育

9月号

## 巻頭言



一般社団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会小学校長部会副部長

鹿児島市立大龍小学校長  
西園 香緒利

## 大人の「センス・オブ・ワンダー」

本県には、国公立の青少年社会教育施設が八つある。いずれの施設も特色ある数多くの体験活動を取り入れた主催事業を提供しており、集団生活と自立の大切さを学ぶ宿泊学習をはじめ、学校や家庭では得がたい生活体験・自然体験プログラムが盛りだくさんである。また、新学習指導要領に基づいた学習プログラムも開発中であり、学校教育にも寄り添う施設としての役割をありがたく感じている。

七月に霧島市牧園町を訪れる機会を得た。その昔、四年ほど住んでいたエリアでもあり、久しぶりの訪問で、ワクワクしながら向かった。車から降りた瞬間、吹き抜ける爽やかな風や目の前に広がる霧島の大自然が身体全体を包み込み、心身共に何ともいえない心地よさを実感した。この感覚・「センス・オブ・ワンダー」を忘れていない自分自身が嬉しかった。

私が以前勤務していた県立霧島自然ふれあいセンターは、この牧園町にあり、本年度四月から指定管理者制度導入施設として、新たなスタートを切った。指定管理者制度は、民間のノウハウを取り入れることができることで、柔軟かつ特色ある運営が一層可能となり、これまで縁のなかつた方々にも利用していた

だけの館となるよう生まれ変わったのである。しかしながら、昔も今も、施設の根っこ部分にあるのは、「センス・オブ・ワンダー」を重んじる精神。一九〇七年生まれの生物学者レイチェル・カーソンさんがお書きになった本「センス・オブ・ワンダー」の中に、「子どもたちの世界は、いつも生き生きと新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれている。」とある。神秘さや不思議さに目を見張る感性「センス・オブ・ワンダー」を、私たち大人も大切にしていきたい。

庭に一輪の小さな白い花が咲いていた。その花を見て  
「きれいだね、この花。」  
と、つぶやく我が子。  
「そうだね、きれいだね。」  
と、応える母親。

「一生懸命生きてるんだよね。」  
「うん、生きてるね。」  
母親は、美しいものを美しいと思える我が子の感性に心が温かくなったようだ。本物にふれる体験を通して培われる感性は、豊かな人間性を育む支えとなる。大人になっても幸せだと実感できるこの感性を磨き続けたいものだ。

### \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	14
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	総務部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財団県校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20

令和2(2020)年9月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



## SDGsと地域おこし

(社)いのかわラボ 代表理事 丸山 勝 司

福岡市から鹿児島県の離島・徳之島へ移住して五度目の夏。地域の皆さんに支えられながら全力で駆け抜けてきた四年間でした。今は、徳之島の中心市街地から少し離れた井之川という集落で家族四人の島生活を楽しんでいます。

昨年は念願だった地域会社「一般社団法人いのかわ・ラボ」を設立することができ、協力隊時代の任務で構築したコワーキングスペース「みらい創りラボ・いのかわ」(以降「ラボ」と称す)の管理・運営や小中学生向けのプログラミング教室の運営などを行っています。

この数年間で貴重で大切な人脈も増え、今では島の皆さまより様々なご依頼やご相談をいただけるようになりました。移住定住の相談から近所さんの家電不調の相談まで。大学入試のプレゼンを控えた高校生と一緒にプレゼン資料を作り上げ、ラボで何度も練習し、合格をつかみ取ってくれた時の感動は今でも鮮明に覚えています。

さて、最近よく耳にするようになったSDGs(持続可能な開発目標)ですが、徳之島町も令和元年度「SDGs未来都市」に選定されています。ラボはその活動拠点でもあります。

「あこがれの連鎖と幸せな暮らし」の実現に向けた、経済・社会・環境の統合的な取組を提案したことが国にも高く評価され、選定されています。徳之島町がチャレンジするゴールの概要は次のとおりです。

【経済面のゴール】付加価値の高い生業創出と先端技術導入による『稼ぐ力』を強化

【社会面のゴール】集落から始まるナリワイ(小さな経済)創出と社会的包摂の具現化

【環境面のゴール】エコビレッジとしてのシマの再興とブランディング及び次世代教育

来年二月には、恐らく島で初となる高校(関東圏)の修学旅行をラボで受け入れます。学校の経営計画や修学旅行の事前指導にもSDGsを積極的に組み込んでいる高校です。徳之島の高校とも連携し、事前学習として双方で地域における魅力や課題の抽出と解決策を模索します。そして、現地(徳之島)での交流時に意見交換を行い、事前学習での疑問点などを確認します。地域の魅力や課題の共有を通して、様々な気づきを得て、SDGs達成にも貢献できる有意義な場になるよう準備を進めているところです。また、先日はUターンで島に帰ってきた若手

### 略歴

一九九八年 NEC通信システム株式会社入社  
二〇一六年 徳之島町地域おこし協力隊就任  
二〇一九年 現職に就任

クリエーターから、井之川集落で空き家を活用したカフェを創業したいと相談を受けました。「島のいいモノ・コトと、国内外のいいモノ・コトを提案し、地域の人が交流する場所にしたい。」と目を輝かせて語ってくれました。ラボとしても資金調達、プロモーションでお手伝いすることになりました。島を出て様々な経験を積み、スキルを高めた若者が生まれ育った故郷に戻って、小さくも新しい経済を創出する。まさにSDGs達成へも貢献する活動だと思っています。

我々のような小さな地域会社が事業を創り継続していくのは資金的にも非常に難しいことを経験してきました。行政や地域の皆さんに支えられて今があります。そのことに常に感謝をしながら小さな成功を積み重ねて成長し、地域おこしやSDGs達成へ貢献できればと思います。今、プログラミング教室などで関わりのある子どもたちが、十年、二十年後に島に帰ってきて、一緒にお酒を呑みながら地域おこしについて語りあえる日が来ることを楽しみにしています。子どもたちが帰りたいと思える地域づくりを頑張らねば！それが私の今一番のやりがいです。



## 私たちは未来を創っている 「SDGs」を学校に

国分小(始) 鶴田幸伸

### 一 はじめに

まさか再び「提言」を執筆することになるうとは思っていません。二年前の提言は、お飾りの学校教育目標ではなく、日々の授業実践にまで意識されるよう「学校教育目標を見直す必要性」について提言させていただきました。今回は、本校の教育課程の表紙裏に貼り付けてある下の「SDGs」に関わることを述べたい。ロゴは実際にはカラーで貼付しており、ランドデザインの中にも「持続可能な社会の実現のために、役割を担える教育活動(SDGs)」の一文を加えてある。

### 二 「SDGs」とは何か

日本語では「持続可能な開発目標」と訳されている。線状降水帯という言葉が注目され始めた豪雨や四十度を超す気温が珍しくなくなつた猛暑、そうした気候変動や絶えない紛争、海や森などの環境破壊や汚染、そして貧困・格差などグローバルに解決していかなければならない課題が存在している現代社会である。グレタ・トゥーンベリさんが未来を憂えているように、このままでは次の世代に豊かな地球をつないでいけないという危機感のもとに国連が全

会一致で採択した目標がSDGsである。ロゴに示される十七の目標と百六十九の具体目標で構成されている。

### 三 教職員にとつてのSDGs

教育は、未来を創っていく大きな力をもっている。そのことをもつと教職員が自覚する必要があると思ひ、SDGsを取り上げた。当たり前のことかもしれないが、教職員は日々の授業実践に、学校は学力向上、いじめ問題、保護者への対応と目の前の課題等の解決に一生懸命になりがちであり、未来を創造するということのような大きな目標を忘れがちになりやすい。新しい学習指導要領も「どのような人間を育てたいのか」ということをとても大事にしている。しかしながら、注目は「主体的・対話的で深い学び」「プログラミング教育」などに向けられてしまっている。本来なら、校内でたつぷりと教育観を語り合いたいところである。SDGsを意識することを通して、どういう未来を目指していくべきなのか、どのように子どもたちを育ていけばいいのか、どのように教育活動を展開していけばいいのかというカリキュラム・マネジメント

### 四 子どものために

SDGsは、子どもたちが生きていく今後の未来のために解決しなければならぬ本物の課題である。これらの課題はグローバル化しており、容易に解決策を見いだせるものではなく、できることをできるところから取り組んでいかなければならない。まずはこの存在を知り、課題解決の一端を誰もが担っていることを自覚させたい。総合的な学習の時間で取り組んでいく探究課題は、SDGsと関わる部分も多い。十七の目標との関連などを明らかにさせ、社会参画の意識を高めることにつなげたい。

### 五 おわりに

目標に対して確かに課題があると感じながら何の行動もとれない自分があることに気付く。ただ、すべての目標において教育は重要な役割を果たすことができる。そして、その場に私たちはいる。「誰も置き去りにしない」という基本理念を大切にしながら、持続可能な社会よりよい未来の創り手をしっかり育てていきたい。





## 授業づくりを楽しむ

伊関小(熊) 中 鉢 吉 彦

### 一 はじめに

我が国の未来の担い手を育てる教育。学校現場を取り巻く環境は複雑化・多様化し、学校に求められる役割は大きい。学力向上はもとより様々な力を身に付け、発揮できるように、保護者や地域と連携し、教育活動を展開している。

学校教育においては、その役割をしっかりと果たすよう、授業を中心とした教育活動の工夫・改善、それを実践する教師の資質・能力の向上に取り組んでいる。特に、教育者としての専門性を高め、豊かな人間性、社会性等を絶えず磨いていくことが大切であると考え

### 二 教育は人なり

世の中は日々、成長・変化していく。今後にも更に進んでいくであろう。また、予想もしない対応に迫られることもある。教育活動を工夫・改善する教員一人一人の力がその源である。

また、学校経営構想を具現化するために教育の動向や子どもや地域の実態を踏まえた教育課程を実際に展開するのも私たち教師である。

当たり前のことであるが、教師一人一人が学校教育の担い手であり、一枚岩で、組織で

自校の教育に懸命に取り組んでいると信じている。

### 三 授業を柱に教育活動の充実を

学校教育の中心は授業であると考えている。授業が楽しい、好きだ。という子どもを育てたい。教師にとっては教科指導力が一番の要だ。学級経営の土台は授業であり、学業指導、生徒指導は各教科の授業の中で行われていると考えている。現在一主体的・対話的で深い学び」を研究の視点として多くの実践研究が取り組まれている。このことは、各教科の本質に迫っていくことに繋がり、教科指導力を高めるために効果的であると考え。実践研究を進める過程で、「この教科の指導はそもそもどうあるべきなのか。」「この教科の学習過程は。」「どのように問題解決に取り組む学んでいくか。」等、基本的ではあるが重要なことに、教師自らが「問い」をもち研究していきけるからである。ただし、このような「問い」を抱かせるよう意図的に働きかけることが必要である。教科の特性、学習過程、子どもの思考等を踏まえた授業が常に展開するのはそう容易なことではないかもしれない。まずは、意識して展開するように心がけさせたい。さらには、子どもに「学び方」を定着させることが授業の充実に繋がることに

### 四 授業について語り合う環境を

気付けさせ実践させたい。  
かつて授業研究で、自己反省ばかりの私に「三十年頑張っているが、満足のいく授業はなかったかな。」と切り出し、子どもたちの学びの姿を価値付けてくださった先輩がおられた。それから、先輩や同僚と授業の話をよくするようになった。その中で、繰り返し「子どもにどんな力をつけるために、何を、どう学ばせるのか、「目標」と「内容」と「方法」を明確にすることが大切だね。」と先輩はよく話してくださった。今振り返ると、「そこを突き詰めよう。」と促してくださっていたのだと思う。実態に応じた工夫が必要であり、状況によって手立てが変わる。「授業は生ものだから。」この言葉も「状況に応じて対応できる力が必要だよ。」と教えてくれたのだ。

多くの授業を見せていただいたり、授業研究に参加させていただいたりしてきた。この三つの視点で授業を分析するようになっていた。それにより、授業改善のポイントが見えてきた。

授業について日頃から語り合ってきたと思っていたが、先輩や同僚に気付かせてもらっていたとしみじみ思うことである。当たり前のことが私はようやく分かってきたような気がする。今も授業づくりは楽しい。同僚に感謝している。

### 五 まとめ・おわりに

仲間と共に取り組む授業づくりは、時間をつくり出す工夫・努力も必要である。しかし、子どもの成長、教師の成長に必ず繋がる。よりよい教育を提供できるように授業力を高め業務改善を推進していきたいものである。



## 小規模校のよさを生かし、 地域とともにある学校を目指して

旭小(旦) 川畑 幸博

### 一 はじめに

本校区は、いちき串木野市の北東部、薩摩川内市に隣接し、校区の中央を国道三号線とJR、南九州西回り自動車道が縦断している。周辺を山に囲まれ、冬場は寒さが厳しく積雪や道路凍結で交通が遮断されることもある。かつては金山で栄えた校区であるが、現在は過疎化・高齢化が進み、それに伴い児童数も減少し、特認校制度を利用し通学している七人を含め、全児童数三十一人の四学級の編制である。

### 二 学校経営方針の具現化

小規模校のよさを生かし、一人一人の子どもを大事にして確かな学力や豊かな人間性、健康・体力向上など「生きる力」を備えた子どもの育成のため諸々の具体策を講じている。

また、同じ敷地内に幼稚園が併設され、幼稚園との交流を通して、思いやりの心の醸成とともに「小一プログラム」「スタートカリキュラム」等の教育課題の解決にも大きなメリットとなっている。秋季運動会や学習発表会、避難訓練等をはじめ、諸行事を合同で実施している。

#### (一) 学力・学習意欲アップ

- ・全職員一回以上の研究授業の実施
- ・管理職の授業参加と交換授業の推進
- ・ICTの積極的活用・TV会議システム
- ・毎週木曜日の放課後に「学力定着の時間」の設定(二十分間)
- ・家庭学習の手引の活用

#### (二) 人権感覚・思いやりアップ

- ・縦割り活動(集団登下校・委員会活動・清掃・ボランティア活動)
- ・担任会による情報交換
- ・「学校楽しい」との実施と分析・活用
- ・人権の花運動の推進(人権集会の実施)
- ・名前付けあいさつ先手運動・門札の推進
- ・隣接する幼稚園の園児とのふれあい給食
- ・青少年赤十字活動の推進(ボランティア)

#### (三) 健康・体力アップ

- ・むし歯の治療率一〇〇%(昨年度は達成)
- ・全国はみがき大会への参加(六月)
- ・月一回の安全タイム(KYTの推進)
- ・幼稚園との合同避難訓練(火災・不審者引渡訓練)
- ・一校一運動(二輪車・かけ足)の推進

### 三 地域とともに歩む学校

#### (一) 伝統芸能の継承

本校区には「虚無僧踊り」「金山石当節」の伝統芸能がある。地元の保存会の方に毎年十一月に行う生活・表現発表会に向けて指導をしていただいている。着物も新調していただき、子どもたちも一層、意欲的に練習に励み、地域のよさを  
知る場となっている。



#### (二) 寺子屋活動

昨年度から夏季休業中に近くの交流センターで課題や習字などを地域の方々や保護者に教えていただいている。全児童の半数近くが参加し学習を進め、地域の方にとっては子どもを知る場にもなっている。

#### (三) 集団登下校の見守り

四人のスクールガードの方々から三方向から登校する子どもたちの登下校をほぼ毎日見守っていただいている。

### 四 おわりに

子どもの心身ともに健やかな成長のため、学校・保護者・地域が連携を緊密にして小規模校のよさを生かした旭小ならではの教育を今後も進めていきたい。

「チャレンジかごしま」への応募

・体力運動能力調査結果の分析と活用



## Heart-warming-school

## 「笑顔・信頼・誇りのある学校をめざして」

手々小中(大) 竹野 博文

## 一 はじめに

本校区は、自然に恵まれ風光明媚で、心身の健全育成に適した環境にある。一方で、高齢化・過疎化に伴う少子化が進み、児童生徒数が減少してきている。現在、児童生徒数十二名の極小規模の小中併設校である。

個別指導は充実しているが、学び合いや切磋琢磨する機会は少ない。したがって、個人差や学級差があること、学習への心構えや学び方の定着に不十分さがあることなどから、学力向上は、本校の重点課題である。

児童生徒は、明るく、素直で、仲がよく、面倒見もよい。また、本校は、県外から留学生を受け入れている。そのため、規範意識や生活習慣の定着を図ることや、よりよい人間関係づくりを進めることなど、心豊かな児童生徒の育成を進める必要がある。

## 二 学校経営の信条(めざす学校の姿)

本校のキャッチフレーズは、「Heart-warming-school」(心温まる学校)である。心温まる学校を、「笑顔・信頼・誇りのある学校」と考え、めざす学校の姿を次の三つとした。

## 三 実現のための方策

○ 児童生徒にとって「学校が楽しい、明日もまた来たい」と思える学校

○ 保護者・地域住民から信頼される学校

○ 職員が生き生きと活動し、やりがいをもって働く学校

(一) あいさつと笑顔があふれる「手々笑仲楽幸」にする。(笑顔にあふれ、仲がよく、学校が楽しい、毎日が幸せに感じる学校)

ア 立ち止まってあいさつ、語先後礼

イ 思いやりのある声かけ、気配り

(二) 自己肯定感や自尊心、道徳性を育み、いじめのない学校にする。

ア 異年齢活動や交流学习による望ましい人間関係づくり

イ 一人一人の道徳的価値を育む「考え、議論する道徳科」の推進

(三) 学ぶ意欲を高め、確かな学力の向上を図る。

ア ICT機器を活用した授業の実施

イ 基礎的・基本的学習内容の確実な習得(チャレンジ・学力向上タイムの設定)

ウ 家庭学習の習慣化

(四) 健康な体づくりと安全に努める。

ア 健康な体づくり(ラジオ体操、チャレンジ鹿兒島への挑戦)

イ 早寝・早起き・朝ごはんの啓発(家庭との連携)

(五) 危険予知能力や危険回避能力の育成

ア 授業力の向上(一人一研究授業、個人テーマの設定)

イ 互いの実践に学び合う同僚性の高い職員集団(OJTの推進)

(六) 保護者や地域社会と連携・協働する。

ア 地域への愛着と誇りを育てる体験活動(われんきやガイド、手々ヘルパー隊、ボランティア活動)

イ 四校合同研修の推進(遠隔合同授業)

ウ 情報の積極的な発信(各種たより、HPの充実)

## 四 おわりに

保護者は、子どもたちが、いずれ島外に出ていくことを考慮し、小中九年間で子どもたちが自立(自律)できるよう願っており、どの家庭も学校に協力的である。また、地域住民は、準PTA会員として、学校行事を始めとする教育活動に協力的であり、愛校心の高い地域である。この環境を職員・保護者・地域住民と共に堅持していく必要がある。



## 自ら深く考え、 行動できる子どもの育成を目指して

西谷山小(市) 東 浩 一

### 一 はじめに

本校は、昭和五十三年に谷山小学校から分離して誕生した学校で、今年で創立四十三年目を迎える。毎年児童数が増加しており、現在、学級数三十七学級、児童数千十五名の大規模校となっている。

本年度は、学校教育目標を大幅に見直し、これまでの学校教育目標を踏まえながらも、新たに「自ら深く考え、行動できる子どもを育てる。」と設定し、日々教育活動の充実に取り組んでいるところである。

### 二 取組の実際

本校では、物事を深く考え、それを行動に移せる人間を育てるために、「よく考え、よいと思ったらすぐやる。」をキャッチフレーズとして、あらゆる場面で実践できるように声かけや指導を行っているところである。以下、その中で特徴的な取組である「挨拶」と「自問清掃」の二点を紹介する。

#### (一) 挨拶

本校では、「目で見て、声に出し、心に届く挨拶」を目指している。気持ちのよい挨拶とはどういうものかを子どもたちに考

えさせるとともに、児童会においても朝の挨拶運動を行っている。最近では、立ち止まっての一礼や、会釈もだいぶ見られるようになってきている。

このような取組の中、地域の方から、以下のようなありがたいお言葉をいただいている。

「四年生ぐらいの傘を持った女の子が、横断歩道を渡ろうとして待っていました。走行していたバイクが女の子に気付いて停車し、女の子を渡らせてくれました。女の子は渡り終えると、停車してくれたバイクに向かって、深々と頭を下げて走り去りました。その姿を車の中から見ていた私は、せちがらい世の中で、自分の住んでいる校区の子どもたちの礼儀正しい行為に、清々しい気持ちになりました。」

#### (二) 自問清掃

本校では、「汚れているところを探し、無言で清掃ができる学校」を目指し、学年を縦割りにして、上学年が下学年をリードする形で掃除を行っている。その取組の大きな特徴としては、心を磨く三つの玉と

して「がまん玉」「しんせつ玉」「みつかけ玉」を合い言葉に取り組んでいるところである。「がまん玉」とは、最後まで無言で掃除に取り組むということ、「しんせつ玉」とは、友達の良いところを見つけたら、助け合ったりするということ、「みつかけ玉」とは、汚れているところはなにか探し、さらにきれいになるように隅々まで取り組むということである。掃除時間終わりには、必ずこの心を磨く三つの玉の視点で反省をして、次に生かしていくという取組を行っている。この取組の成果としては、大人でも気付かないであろう部分を積極的に探して掃除する子どもや、時間内に早く掃除が終わり、別の掃除場所の手伝いをする子どもたちが現れてきていることが挙げられる。

### 三 おわりに

国際化・グローバル化した社会では、国際感覚をもって世界で活躍する人間を必要としている一方、同時に地方創生が叫ばれ、地域で活躍する人材も必要としている。また、科学技術の発展はめざましく、今の最新技術があつという間に陳腐な古い技術となっていく時代であり、十年後は現在の仕事の半分はなくなってしまうとも言われている。そのような予測不可能な社会の中で、自分自身で未来を切り開き、力強く生き抜いていくために、「深く考える。」という力、そして「行動する。」という力が、きっと子どもたちを支えてくれると、私は信じている。



## 輝け小宝っ子

小宝島小(郡) 飛松正文

### 一 はじめに

十島村立小宝島小中学校は、面積約一平方キロメートル。周囲約三キロメートルの小さな島にある。小宝島はハイビスカスが咲き誇り、ピロウがあちらこちらに見られ、南国情緒たっぶりの島である。島を廻る約二キロメートルの周回道路を散歩すると、アダンの実が熟す頃には甘い香りが漂う所、天然温泉の硫黄の匂いがする所、見渡す限り一面サンゴが隆起した海岸、奇岩が誇らしげに立っている所、そして、激しく波が打ち付ける海岸等、小さな島ではあるが、自然が豊かで様々な表情を見せてくれる。また、平家の落人伝説もあり、たくさんの神々が祀られ、歴史も感じさせられる。

そんな小宝島にある小宝島小中学校は、小学生七人、中学生三人、計十人の児童生徒が通っている。児童生徒の中には、山海留学生もいる。近い所で鹿児島市、遠い所では大阪からも留学している。本年度四月、小学一年生が二人、中学一年生一人が入学してきてくれた。

### 二 一輪車大会での輝き

本校は、一輪車を一校一運動として取り組んでおり、四月に入学してきた小・中学校一年生も一輪車の練習を始めた。体育の時間だけでなく、始業前に、昼休みに、放課後に、

週休日にも。

新型コロナウイルス感染症予防対策のため、中学校一年生の山海留學生は五月からの登校となり、一か月遅れの練習スタートとなったが、一輪車大会に間に合うようにと練習に励んだ。

一輪車大会のコースは、四つのコースに分かれており、最長のコースで島一周コースの約二キロメートルである。大会当日、今年度入学した小学一年生は四百八十一メートルのコースに挑戦し、見事に走破することができた。この一輪車大会では、小学一年生が輝いた。

一輪車に乗れるようになりたいという強い思いをもって練習に励み、その成果を保護者はもちろん、地域の方に披露することができたのである。きつと、達成感と充実感でキラキラ輝いていたのだと思う。

### 三 水泳大会での輝き

島の短い春が終わり、夏が近づいてくると、サンゴ礁の入り江にできた約二十五メートルのプールで水泳大会を行う。透き通ったきれいな海で魚と一緒に泳ぐ水泳の学習は本土では味わうことができない体験である。

この水泳大会では、中学一年生が輝いた。中学生は、この約二十五メートルのサンゴ礁の入り江を往復十回の五百メートルの遠泳を

行うのである。保護者や地域の方々に見守られ、

「あと一往復！頑張れ！」と懸命に泳ぐ姿に熱い声援を受けながら見事に五百メートルを泳ぎ切ったのである。

今年度、山海留學生として本校に入学したこの生徒は、親元を離れ、友達も知り合いもない土地へと一人で入学してきたのである。たくさんの不安の中で生活していたと思う。しかし、この水泳大会で、小宝島小中学校の友達や里親保護者、地域の方々から応援されたこと、ゴールしたときに祝福されたことによって、自分の居場所を実感し、小宝島への所属感も味わうことができたのではないだろうか。また、自分の得意分野を見てもえたとことで、自己肯定感も高めることができたように思う。

### 四 みんなが輝く学校へ

これまでも同じような経験をしてきたにも関わらず、この小宝島小中学校に赴任して改めて、子どもたちには得意不得意があり、それぞれに輝ける場所があるのだと実感した。それだけに、子どもたちにも様々な体験をさせ、嫌なことであっても、一生懸命に練習に取り組ませ、輝ける場所を提供することが、自分の可能性を見いだしたり、自分自身に自信をもったりして、自己肯定感を高めることに繋がるのではないかと思うようになった。

人は、懸命に取り組む姿に感動し、その姿が輝いて見えるのではないだろうか。今後、子ども一人一人が輝ける場所を提供することができるよう、教育活動を充実させていきたい。そのためにも、子どもたち・職員一人一人の個性を把握し、子どもたちも職員も輝き、学校が輝く経営に努めたい。





どうしたらできる？

溝辺小(始) 高 見 憲 次

新聞づくりをするのでインタビュアーに答えてほしいと子どもたちが校長室を訪ねてきた。「大変だと思うのはどんなときですか。」「どんなときが楽しいですか。」「それぞれが実に愛らしく、それでいて重みのある問いだと感心しながら、一つ一つ答えていった。ある質問で言葉に詰まった。「校長先生は何の仕事をしているんですか。」

十数年前、ある部署に勤務していたときのこと、担当していた事業について外部から内容の一部変更に関する要望があった。それを上司に報告したが、私としては過去の状況から、要望を取り入れた形での実施は難しいと考えていた。報告の後、上司から返ってきた言葉は、「それで、どうしたらできる？」だった。

仕事に対する姿勢を問われた気がした。私にはその言葉が、「どうしたらできるか考えるのが君の仕事だよ。」と聞こえた。それ以来、この言葉と情景がずっと心の中に残り続けている。

本校にも様々な課題がある。特に、本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止もあり、活動の一つ一つについて、目的や価値を再検討した上で実施の可否を決め、様々な配慮を加えながら行ってきた。教育活動全般にわたり、課題の解決に向けてどのように進めていくかを考える重責を日々実感している。

インタビュアーを受けながら、上司のあの時の言葉が再び浮んだ。校長としてどうあるべきかまだまだ定まらない。しかし、漠然とではあるが、子どもたちの学びを支えるために前向きに考え続ける校長でありたいと思った。

真剣に私を見つめるインタビュアーたちには、「みんなが目標に向かって頑張っていけるようにお手伝いすることが仕事です。」と答えた。

出来上がった壁新聞には「校長先生はみんなの笑顔が好きなのだと思います。」と書かれていた。その言葉に嬉しさを感じると同時に、子どもたちの笑顔のために、校長として誠実に役割を果たしたいと気持ちを新たにした。

## 「教師五者なり」

中央中(熊) 岩 川 剛

昭和六十二年に教員として採用され、初めての離島勤務が沖永良部島のT中学校に体育の教員として赴任した。前任者が住んでいた住宅に入居したが、その住宅の隣がK校長の住宅であることは知らされてなかった。校長という役職にアレルギーを持っていたわけではなかったが、気を遣うなと思ったのは、正直な気持ちであった。

赴任をして間もなく校区の歓迎会を開催していただき、保護者や地域の方々との交流を深めることができた。その流れから二次会はK校長宅で行われ、当然のことながら隣に住む私はその夜、最後までK校長と付き合うこととなる。そこで、教えていただいた話が、その後の教員としての歩み方を考えさせられるものとなった。その教えとは「教師は五者でなければならない」と言うことである。

五者とは第一に教師は「学者」でなければならない。教える立場として、自身が研究を続け、生徒に学力を付けさせることが大切だと。第二に、教師は「役者」でなければならない。人を引きつける力を磨くこと、相手の状況を考えながら役者のように演じきり、こちらに目を向けさせることが大切だと。第三に教師は「芸者」でなければならない。時には自ら歌い・踊りな

がら人が楽しく成長できる環境をつくることが大切であると。第四に教師は「医者」でなければならぬ。生徒は成長する過程で様々な不安と向き合う。その不安を共有しながら、一つ一つ取り除いてあげることが大切だと。第五に教師は「易者」でなければならぬ。生徒の特徴や得意なこと、苦手なことを把握し、その生徒の強みを引き出すことが大切だと。この教えをそれ以降の勤務地において実践しようと努めた。成果があったかどうかは、関わった生徒たちが評価するであろう。現在は生徒に関わることもよりの職員への関わりが主となり、K校長から学んだ私が、若い教員へこの教えを説いている。

## 「人から頼まれたことは断らないようにしているんだ」

岸良小中(隅) 塩屋親徳

この言葉は、以前勤務していた学校のA校長から教わった言葉である。A校長は、たくさんの役割を抱えて多忙な身でありながら、いつも冷静な判断をされていた。よく聞くありふれた言葉と思うかもしれないが、私にとっては、とても心に残るひとこととなった。

この言葉には続きがある。「人が自分に頼み

事をするときは、自分のことを見込んで選んでくれたと思うし、実際に引き受けてみると、大変苦労することもあるが、勉強になることが多い。」と話された。

それまでの私は、頼まれ事があると、自分の仕事が増えるから受けたくない、面倒くさい、できれば断りたいと思う方であった。しかし、この言葉を聞いたとき、それまでの自分を振り返ると、とても恥ずかしい気持ちになった。

それからは、私自身も頼まれたことはできるだけ引き受けるよう心掛けていた。おそらく、A校長のようになりたいと思う憧れの気持ちや、この言葉を実践してみたいという気持ちが大きくなったためだと思う。

実際に話を聞く時、自分が依頼を引き受けるという前提で聞くと、依頼された仕事の内容もよく分かり、結果的には、気持ちよく引き受けた方がやりがいもあり、結果も良いものが多くなつていったように思う。自分自身が人に頼み事をするときも、適当に人選するのではなく、頼み事の内容や相手のことを考えてお願いするようにになった。頼み事をする側の立場になって考えると、その頼み事が全くできない、いい加減にする人だったら頼まないし、それなりの成果を出してくれるという確信があれば頼めない。頼むということとは、その人へ信頼や期待をもっていることの証だと思ふのである。

人間の気持ちの変革は、人との接し方そのものを変える力をもっている。冒頭の言葉との出

会いは、私の考え方を变え、人としての幅を広げてくれた。これからも校長として、職員の資質向上のために、仕事を覚える良い機会をつくと考えて、この言葉を意識しながら仕事を頼んだり任せたりして育てていきたい。

## 「人生の最も苦しい・・・」

出水養護学校(北) 中釜和幸

『人生の最も苦しい嫌な辛い損な場面を真っ先に微笑みを以って担当せよ』この色紙が、再配として鹿児島市内の大規模小学校に勤務した際、I先生の教室の黒板の上に掲示してあった。先生の教室に入るとまずその設営に圧倒された。学習してきたことが振り返られるように教科ごとに掲示してある。決して妥協せず児童を励ます指導を行い、夏季休業中も担任する児童全員の家を訪問し、一人一人の状況を確認する熱心な先生であった。

また、I先生は体育主任としてグラウンド整備やプールの管理を中心となつて行っていた。当時は特に降灰がひどく、水泳学習の時期になると始業前にプールに入り、水底の灰をプールのクリナーで吸い出す作業を行わなければなら

## ある日の校長講話



### 「竹の子 初めての始業式」

平川小(市) 塚 元 宏 雄

初めて赴任した小学校の始業式で、小学校二年生から五年生に校長講話を行いました。

新聞紙で覆った根の付いた竹の子を見せ、  
「この中に何が入っていると思う?」と問い、三年生が、「竹の子?」と言ったところから、新聞紙を破り、説明をしました。

『みなさんには、竹の子が竹になるように成長してほしいと思います。竹は、一日で一メートルくらいずつ成長することがあります。ユラユラしていますが、「節」があるので、ポキッと折れることはありません。しなやかで強いです。この「節」は皆さんのあいさつとか、一つ一つの行事での一所懸命な姿と一緒にです。「節」を大切にしてください。また、竹は、一本だけでなく、「根っこ」でつながっています。ですから、

倒れることはありません。みなさんも、友達や先生方、お家の人たちと「根っこ」である心でつながっていけば、自信をもつことができますよ。』

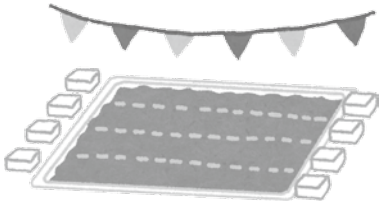
この話を基に、本年度、平川小学校のグラウンドデザインの児童をイメージする姿として、「すくすくと育つ竹のように——「節」を大切に、しなやかに強く。「根っこ」でつながり自信をつける——」を付け加えました。

後日談ですが、一年生担任が、新入生全員に、この話をしてくれました。その際、担任が、「竹の子は、大きくなったら何になると思う?」と問うと、ある児童が、「モグラかなあ。」と答えました。その話を聞いて、植物と動物の違いは分からなかったにしても、尖ったところや皮膚の色や質感のイメージが似ているところを感じ取り、答えたことには驚かされました。

児童には、自分や他者のよいところをたくさん見つけて、自己肯定感を高めながら、竹のようにスタスタと育ってほしいと思います。

なかった。六月の水温はまだ低く、水に入っていると、冷たさでぶるぶる震えることもあった。勤務時間前のためI先生は誰にも依頼することなく一人で行っていた。それに気付いてからは、若手の職員が率先して行うようになった。当時は、先輩から手取り足取り指導してもらうのではなく、先輩の姿を見て学ぶという時代だったと思う。体育部で話し合い、小体連の理事もされていたI先生にできるだけ負担をかけないように作業をした思い出がある。いつの頃からか、体育部はI先生にちなんで「I組」と呼ばれるようになった。そう呼ばれることを誇りに思っていた。私の転勤が特別支援学校に決まった際、I先生は黒表紙の厚さ十センチにもなる資料を二冊貸してくれた。それは過去に特別支援学級を担任した際の日々の細かい記録であった。少しでも先生に近づきたいと取り組んだ日々を懐かしく思う。先生は、まさに冒頭の言葉どおりの生き方をしておられた。

残念ながら現職中に突然の病で亡くなられたが、その生き方は私を含め当時の若手職員の心に今も深く刻まれていると思う。



## 今週は全校を挙げて

### 「いじめ問題」を真剣に考えよう

日吉中(日) 秋 野 繁 幸

今週は「いじめ問題を考える週間」です。

本日の全校朝会での話を皮切りに、各授業において機会を捉えて教科の先生からいじめに関する話をしてもらったり、いじめをテーマに道徳の授業を行ったりします。その都度、生徒の皆さんは自分のこととして真剣に考えてほしいと思います。いじめは今に始まったことではなく、これまでも日本全国の学校でたくさんあり、学校生活で最も排除すべき卑劣な行為です。最初は、さりげない無視、ちよつとした嫌味、相手にワザと聞こえるような陰湿な悪口や嘲笑などから始まります。またそうした「言葉や態度によるいじめ」が学校では最も多いという統計もあります。次の段階では、明確な仲間外れ、ノート破り、持ち物隠し、落書き、次第にエスカレートし、行き着くところ命に関わるような事件につながっていくようです。心はずたずたに踏みにじられ、人間としての尊厳が完全に否定されることは言うまでもありません。すべての人間に保障されている「人間らしく生きる権利」である人権が尊重されておらず、いじめのどのレベルであっても被害者の「基本的人権」を著しく侵害しているといえます。日吉中学校は「人権教育」を強く推進している学校で

す。人権について詳しく多くのことを学んでいる皆さんだからこそ、人権侵害であるいじめを絶対しないよう心がけてください。次に「いじめを見たときに、止めに入りますか?」という質問について「はい」と答える人の比率が、他の国では年齢が上がるにつれて単純に増える傾向にあるのに対して、日本ではいじめの多発期(小学校5年生頃から中学校2年生くらいまで)には低下する傾向があります。つまり積極的にいじめを止めようとする人が少ないということです。

「自分にされて嫌なことは人に絶対にしない」「いじめに気づいたらそれをやめさせる人になる」「この二つのことをお願いとして、今日の話は終わりとなります。

## あいさつの大切さ

万世中(南) 西 蘭 和 是

「おはようございます」今日も気持ちのよいあいさつができました。でも、いま言った、あいさつとは何でしょうか。

「おはようございます」や「こんにちわ」の言葉自体にはあまり意味がありません。なのに、何故、あいさつがこんなにも大切とされているのでしょうか。

実は、あいさつには『自分の心をひらく』という大切な意味があります。

心をひらくことで、「あなたは敵ではありません」という合図を相手に送っているのです。だから、あいさつをして気持ちがいいのです。心をひらくことは、コミュニケーションの入り口です。お互いに味方であることを確認して、初めてコミュニケーションが成立します。第一印象で、あいさつが大切と言われるのは、互いに味方かどうかの確認作業が必要だからです。反対に、あいさつを相手が返さないと嫌な気分になるのは、相手が自分に対して敵意をもっている、こちらが受け取るからです。

また、心を開く行為である、あいさつは、相手の存在を認めていることを相手に積極的に伝える行為でもあります。

そんな、あいさつをする上で大切なポイントは、笑顔で明るい声で、心をこめて、あいさつをすること。「あなたと良好な人間関係を築きたい」という心が大切です。

一番大切なポイントは『自分から、あいさつをする』こと。相手がしてくれたらするというスタンスではなく、自分から、あいさつをする積極性が大切です。もちろん、あいさつを返してくれないという人も多いかもしれませんが、返事がなくても、あいさつをし続けることが警戒心を解く唯一の方法かもしれません。

そして、できれば、あいさつの続きに一言加えること。「元気ですか」「調子よさそうだね。」そこからあなたとのコミュニケーションが始まります。

# 話のひろば



## 心に残る世界大会

阿多小(南)

加藤 宣行

昨年秋に実施された世界大会の中で、特に印象に残っているのが「ラグビーワールドカップ2019日

本大会」である。それは、ただ単に日本が目標のベスト8に進出したからというだけでなく、ラグビーで大事にされている言葉、とりわけ日本で馴染みの深い言葉が体現されるシーンを幾度となく見ることができ、改めてそれらの言葉がもつ意味の奥深さを感じ、感動の連続だったからである。

それを最初に感じたのが、九月二十八日に行われたアイルランドとの一戦だった。日本は、『ONE TEAM』【One for all All for one】の言葉のとおり、一人一人が自分の役割をしっかりと果たしながら、勝利という目標に向かってチーム一丸となって試合を進め、見事に大金星を挙げた。そして、試合終了後には、格下の日本に敗れたアイルランドの選手が花道をつくって、グラウンドを出る日本の選手たちを拍手で送り出す。全員が通りすぎると、今度は日本の選手たちが花道をつくる。その間をアイルランドの

選手たちが通り、日本が拍手で迎え入れる。まさに、試合後は敵味方関係なく同じ仲間だというラグビー精神を表す『NO SIDE』を体現する光景が見られたのである。

学校は、みんなで学習したり、運動したり、遊んだりするところである。まずは一人一人が努力する、責任を果たすことが大事だが、みんなと協力することもとても大切である。学級が…、学年が…、学校が一つになって、同じ目標に向かっていく。特に行事では、準備や練習から時間を大切に、みんなで協力したり、励まし合ったりしながら取り組まなければならぬ。また、競い合った後は、結果を受け入れ、お互いの頑張りを読え合い、次に向かうのである。そして、そのような体験を通して、達成感や成就感、所属感が得られ、自己有用感や自己肯定感が高まり、最後までやり抜く粘り強さや協力・思いやりなどの豊かな心情が培われていくのだと思う。

これから、行事の多い二学期を迎える。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響でいろいろな行事が実施できるのか？難しい状況である。だからこそ、子どもたちには一日一日を…、一つ一つを…、一人一人を…大切にしたい。そして、ラグビーで大事にされているこの三つの言葉を心に留めて、何事にも前向きに頑張っ



## 「うわさ」を信じ ちやいけないう

紫原中(市)

花月 敏郎

私の心はうぶなのさと続いて出てくる方はおそらく同世代。言い得て妙な歌詞である。

新型コロナウイルス

ルス感染症について、国内で最初に報道がなされたのは昨年の大晦日。当時は遙か彼方にあり自分には全く関係ないと思っていたはずのものが、今はすぐそばにある。見知らぬものが近づいてくるにつれ、周りに増えてきたのが「うわさ」話であった。

「〇〇から聞いた話だけど。」「〇〇学校では保護者が多数感染して大変らしい。」「感染したのは〇〇さんの所の〇〇さんだって。」

職場や地域社会、仲間内ではこのような会話が交わされ、SNS上には明らかにデマと思われる情報も拡散されている。人間は孤独になればなるほど、デマ等に簡単に振り回される傾向があり、対応は容易ではないようだ。

さて、鹿児島県では、昭和四十年八月十一日に同和対策審議会答申が出されたことにちなみ、八月を人権同和問題啓発強調月間と定め、様々な取組を行っている。私も先日、ある成人学級で人権全般に関する講演の機会を得、七分間ほど話をさせていただいた。

勘違い、思い込み、間違った理解等がもとで偏見が起き、差別へと悪化し、様々な人権課題が生まれていく。そうならないために、最初の段階で正しく知る、知ろうとすることが大切であること。「うわさ」に惑わされないように、ちよつと待て、本当かな？と冷静になることが

求められること等を伝えさせていただいた。

講演終了時、受講者の方から同和問題について詳しく説明してほしいとのご要望をいただいた。この問題を解決するためには、自分たち高齢者が正しく理解し、若い世代に正しく伝えることが必要であるとのご意見を添えて。次の機会をいただければ、時間をかけて一緒に勉強しましょうと約束して会場をあとにした。

「うわさ」は人間関係を粉々に壊し、社会の分断をも引き起こす。持続可能な社会の創り手を育成していくために、コロナ禍の今だからこそ、地域ぐるみで連携・協働し、早急に取り組むことが必要ではないだろうか。

## 「見直し」のとき

霧島高

原 憲 一

コロナ禍の苦悩続きは「見直し」の時期と捉えた梅雨の中、うれしいニュースに力湧く。藤井新棋聖の誕生である。彼はインタビュで、コロナで対局できない時期は「自分自身の将棋を見つめ直すことができたのがよかった。」と話した。高校生が活躍し自分のやるべき事をしっかりと見据えて、見つめ直すことの意義を大一番で示してくれたことは、将棋界に寡聞な私でも無条件に勇気と感動をいただいた。

外出自粛中、普段やり付けない家の掃除で発見があり、職場では業務削減や行事について模索と工夫。世の動きでは試行錯誤の結果、思わ

ぬ効果のニュースなど、人の考えや行動は案外変化できるものだと感心もし、自身の衛生観念の見直しや免疫力向上に一層腐心する一方で、己の不可変的な慣性に軽い諦念も入り交じる。もうこうなったら、自棄のやんばちだと、録り溜めていた山田洋次監督「男はつらいよ」シリーズを見直した。風の吹くままに寅さんに連れて行ってもらいたかった。旅先は、北海道から沖繩と日本だけに留まらず、欧米にまで及ぶ。しばし逍遙、莊子の胡蝶の夢見心地で寅さんになった。鹿兒島も数品。今回はシリーズ第三十四作目「男はつらいよ・寅次郎真実一路」マドンナのふじ子さんは大原麗子さん。その夫で仕事一筋で心身共に疲れ果ててしまう証券マン役の米倉斉加年さんが失踪。それを探しに夫の故郷鹿兒島に寅さんとふじ子さんが、昭和五十九年当時のさつま湖に鹿兒島駅、枕崎駅と丸木浜や鰻池、桜島迫る城山展望所など大隅半島出身の私を昔の薩摩半島へ連れて行ってくれた。旅先の旅館でふじ子さんが夫の思い出の地を歩いて「今まで気付かなかった主人の心のうんと奥の方、覗いたような気がしたの。」と寅さんに話した。いつもならこの後、笑い皺に涙が染みる展開だが、今だと穿ちぎみに深く観てしまう。

さて、夢から覚めて現実、経済優先の社会が後手となり、持ち駒の打つ手も詰まった感もある。棋譜にも載っていない状態か。じっくりと見直し策を練るうにも、「待った」がきかない世間という棋盤を前に腕を組む。

## 読書案内



■渡辺和子 著

置かれた場所で咲きなさい

市比野小(北) 丸山博 三

みなさんは、路傍に咲く一輪の花に目を奪われた経験はないだろうか。私は、寒蘭の派手さはないが、さりげなく自己を顕示しつつも、しつこさのない芳香に心を奪われたことがある。

この本に初めて出会ったのは、当時ベストセラーとなったことがきっかけだった。著者は元ノートルダム清心学園理事長の渡辺和子氏である。亡くなられてもう四年が経とうとしている。本書は、今も私に傍らで勇気をくれる。

渡辺氏は若くして、ノートルダム清心女子大学の学長に就かれており、多くの功績を残されている。本書で、何度となく登場する「置かれた場所で咲きなさい。咲くということは、仕方がないと諦めるのではなく、笑顔で生き、周囲の

人々も幸せにすることなのです。」というフレーズは、渡辺氏の経験に裏付けされた、とてもポジティブな生き方を示していると思う。

マザー・テレサの来日時の記述に、とても興味深いものがある。マザー・テレサは、日本の印象について、街並、建物、服装のすべてが「きれいな」といわれたそうである。しかし、こうも言われたそうである。「きれいな家の中に、親子の会話、夫婦のいたわり合い、ほほえみがないとしたら、インドの小屋の中で仲睦まじく暮らす家族の方が豊かである。」確かに、自分の教職人生を振り返ってみると、きれいな街並とは裏腹に、置き去りにされた人々の心のつながりを感じたことがある。

また、子育てについて渡辺氏は、「親の価値観が子どもの価値観をつくる。」と言われており、価値観は言葉以上に、実行している人の姿によって伝えられるのだと結ばれている。

変化とストレスの多い時代にあって、仕事とどう向き合うか。周りの人とのように付き合うか。そして、自分自身の老いとのどのように向き合うかなど、ふと立ち止まったとき、傍らで支えてくれる一冊の本である。

幻冬舎 九五二円



■久保田 里花 著

## 伝記を読もう 『椋鳩十 生きる素晴らしさを動物物語に』

高岡小(隅) 井之脇 満

小学校に赴任し、児童への読み聞かせに、椋鳩十先生の動物物語を使わせていただいていた。

六月の日曜日、三十年ぶりになるうか、加治木町の椋鳩十文学記念館に入った。中には、小学校高学年の女子児童が一人先に入っていて、「マヤの一生」のアニメを鑑賞していた。私は、現在住んでいる末吉町南之郷や志布志町四浦で椋先生が取材されたときのメモを読みながらも、聞こえてくるアニメの音声に耳を傾けていた。

この本は、椋鳩十先生のお孫さんの久保田里花さんの著書である。先生の経歴や功績が一三三ページに凝縮されていて、資料編の十三ページも充実し、その足跡が一目でわかるようになっていた。

新聞でも紹介されたので読んでみたいと思っていたところ、この三月に転出した本校教諭が、一月に出席した研修会で久保田里花さんの講演を聴く機会に恵まれ、本書を購入しサインをいただき、本校図書館に寄贈してくれたのである。早速、読み進めると、先生に「お前は、おれに、似てるなあ！」と言われた里花さんならで

はの視点が随所にちりばめられ、興味深く一気に読み終えた。戦時中、女子高校の教員として長崎県の魚雷工場に生徒を引率したこと。戦後、県立図書館長時代にGHQから軍国主義的な図書を焼き払えと命令されても拒んだこと。晩年、教科書で「大造じいさんとガン」を学習した児童からの手紙に一枚一枚返事を書かれていたこと、等々珠玉の逸話が描かれている。

本書は、著名な作品が成立した背景なども説明しているので、椋文学の案内書にも適している。なお、この著書は、「あかね書房」が出版した「伝記を読もう」シリーズ全十九巻の十六巻目として収められている。本書を児童・生徒にぜひご紹介いただければと思い、あえて紹介させていただいた次第である。

三十年ぶりにたまたま入った文学館で、「マヤの一生」を視聴する児童がいた。「鹿児島島の教育は素晴らしい」と感じ入ったひとときであった。

あかね書房 一五〇〇円＋税

■工藤勇一 著

## 麹町中学校の型破り校長 非常識な教え

平尾中(北) 松久保 謙太郎

本書の「世の中まんざらでもない。結構大

人って素敵だ！」と子どもに思ってもらうことが学校の最上位の目標であるというところが印象的である。私は、本書を読んで教育の本質を見つめ教育改革を進めていけば子どもたちが十年後、二十年後に生き生きと活躍し、社会を変えていくような力をつけることができると感じた。

どこの学校でも「自律」した人間を育てるためにはどうしたらよいか日々考え、取り組んでいる。しかし、なかなか思うように成果があがらないこともあり、悩むこともある。

著者は、子どもたちが「社会の中でよりよく生きていけるようにする」という学校の本来の目的に立ち返り、これまでの慣例を徹底的に見直す必要性を述べている。そして、これまでの学校教育からすると「非常識」と思われる教育改革を次々に打ち出している。例えば「宿題と定期試験は廃止する。」代わりに単元が終わるごとに小テストを実施し、合格点に達しない生徒は再チャレンジさせる。学校が責任を持って一人ひとりの学力保障をするということである。「固定担任制を廃止する。」全員担任制にすることで、教員全員がチームを組んで、生徒にとつて最適な対応ができるようにする。生徒は、担任でなくても学年の中で気の合う教員がいれば安心である。「頭髮、服装の校則を廃止する。」もし、服装や頭髮の乱れなどの行動の変化が出てきたら「なぜそうするのか」、生徒理解を積み重ねながら「生徒に届く指導」に発展させていく。変革を阻むのは、「人」である。子どもは本来、主体的に生きる力を持っている。そし

て学校は、その子どもの意欲を高める場所であり、学んだことが社会で生かせる教育をしななければならぬ。学校は、これまで「当たり前」と思ってたやってきたことを見直し、安易に前例踏襲にならないように全職員でアイデアを出し合い、小さな改善を積み重ねていかなければならないと強く感じた。

S B クリエイティブ株式会社 八三〇円＋税

## ■南日本新聞社 編

### アダンの画帖 田中一村伝

大島北高 下高原 涼 子

奄美大島は二回目の勤務となる。本校が旧笠利町にあることもあり、奄美パーク田中一村記念美術館に行く回数も十回を超えた。一村の絵の展示と共に時の心情を吐露した一村の言葉が心に響く。「私は人生の修行や絵の勉強に來ているのではなく、絵かきとしての生涯の最後を飾る絵を描くために來ているのです。」一村が知人に宛てた手紙の一部である。若くして天才画家と言われたが、東京美術学校に入学後は病などの不遇が重なり中退となる。昭和二十二年、第十九回青龍展で『白い花』を初出品して入選したものの、翌年に出品した自信作『秋晴れ』（現

在奄美パーク田中一村記念美術館展示中）は落選してしまう。選考経過を見ていた一村は納得がいかず、これまで敬意を払っていた画家川端龍子と意見を異にし、その後は画壇との接触をほぼ断つことになる。

昭和三十三年、千葉での生活を清算し、奄美大島を終生の絵を描く場所として選んだ。大島の職工として苦しい生活を支えながら、亜熱帯奄美の植物群をモチーフとして、ひたむきに描きつづけた。本校にも一村が作品のモチーフとした数多くの植物がある。

一村の筆にかかると、山川草木、一個の石ころにも個性が見いだされ、それぞれが「個は他を殺さず」に十分な存在感を持って、生命の緊張感が画面に描かれたという。

本書を一読すると、画壇に背を向け、望郷の思いを胸に、残り十九年間の絵描き人生の日々をこの奄美にかけ、鋭い感性で描いた数々の作品の深さに改めて共感できると思う。

教育に必要なものは、発達段階にある子ども一人ひとりの資質・能力をその子どもの生き方、どう繋げてやれるかである。奄美大島には歴史や文化、生命感みなぎる自然など人間力を育む豊かな教育資源がある。本書をとおして、心の豊かさとは何かを見つめ直す良い機会にもなった。

道の島社 一、六〇〇円



旅行が好きだ。初めての海外旅行はグアム島。青年団の女子五人で二月の寒い日本から大きなスーツケースを抱えて脱出した。着ていた重いコートを成田空港のコインロッカーに押し込み、Tシャツにジーンズというラフな格好で北ウイングと書かれた案内掲示板の前で写真に収まっている。三十年余り前のことであるが、グアム国際空港に降り立った真夜中、じわっと汗が滲むような蒸し暑さは今でも鮮明に思い出される。

その後、お正月にオーストラリアへ行ったり、同僚四人でヨーロッパ三か国を巡ったりするなど、日々儉約生活をしながら旅行のために貯金をしてきた。鹿児島から行くともなればこの際だからという思いで、メイン旅行の前後にも各地の名所に立ち寄った。旅行雑誌で読んだり、テレビや映画等で見たりしたのとは違い、本物に出会えることがさらに気分を高めてくれる。初めて見るもの、初めて食するもの、初めてふれるものなど、何をとつても充実感・満足感でいっぱいになつていったものだ。

平成十八年には上野カネ奨学会からヨーロッパ四か国を巡る国外研修の機会にも恵まれた。仕事や諸事情により大好きな旅行に行けない年が続いていたため、参加させていただけるとは、この上もない喜びであった。説明会や打合せ、帰国後の報告会に研修報告書の作成と、これまでの自由気ままな旅行とは違っていたが、初めて訪れる国々への期待感に胸が躍り、苦に

## 趣味・文芸

### 素敵な発見を上書き保存

鶴峰小(隅) 中村 成美

も感じなかった。また、個人旅行ではなかなか訪問できないような施設、旧跡の見学や、人々とふれ合い、語り合うことで日本とは異なる至福の時間を過ごせた。

国内ではスキーを目的に、毎年冬休みを利用して北海道に行った。夏の北海道も魅力的だった。ただ、日本各地を巡ったものの未だ東北地方には行ったことがない。

そもそも、私の旅行好きはいつから始まったのか。お金がなかった大学時代、新幹線やフェリーなど様々な乗り物やルートで行き来したことに端を発するのではないかと思う。世の中に

あるまだ私の知らないものをこの目で確かめ、その空気を吸い、その土地にしかない雰囲気を感じたかったのではないだろうか。国内外問わず、行ってみたい、やってみたいという好奇心の強さが転じて旅行好きの私をつくり上げたに違いない。

とは言え、近年、事件や災害など少々心配事が増えたことや、一緒に旅を楽しんでくれる友人との日程が合わないことなどもあり、旅行が難しくなった。だから、転勤した先々でプチ旅行気分を味わうことにしている。

二度目の奄美大島勤務では、ドラマの撮影現場や本に出てきた場所を散策したり、伝統行事

にも参加したりした。アマミノクロウサギを観察するナイトツアーに出かけたり、シマ歩きや海遊び、八月踊りや加計呂麻島を一周したりするなど、休みを調整してはいろいろな場所へ出かけ、ここでしか味わえない活動を存分に楽しんだ。素敵な思い出である。

さて、コロナ禍、さらに旅行は遠のいている。地元大隅は交通の便に難ありと思っている私だが、今こそ安・近・短。郷土のすばらしさを味わうときではないかという思いで、母を助手席に座らせハンドルを握る。鹿児島島の風景・食べ物・お店などを紹介しているテレビ番組や新聞

等に掲載してある催し情報などもチェックしながら。私が子どもの頃とは違い、道路が整備され、新たな施設ができるなど、遠い遠いと思っていた所にもすんなりと思っていける。そして、不思議なことに再度訪れることで、大隅ならではのよさがたくさんあることに気がかされる。

終戦から七十五年を迎えたこの夏、地元の戦跡巡りやパネル展に出かけた。また、おいしい果物を求めて校区内にある観光農園でブドウやブルーベリー狩りもしてみた。

海外や国内旅行に魅力を感じていた頃もあったが、今は新鮮な気持ちで我が故郷の歴史にふれ、身近な場所を訪れることで、それらを楽しみ、自分の頭の中を上書き保存している。山と野と渚の豊かなこの地で、新たな発見に期待を膨らませて。



## 黎明の地

羽島中(日) 西村喜一

南九州西回り自動車道を串木野インターで降り、西に向かってしばらく走ると、かつて日本有数の金の産出地であった串木野鉦山が右手に見えてくる。さらに進むと、日本初の国家石油地下備蓄基地の施設が目の前に現れる。そこから北西に進路をとる。岩場と砂浜が混在する起伏の多い海岸線が続き、東シナ海の水平線には、甌島のシルエットが浮かぶ。窓を開けると、潮の香りをうんと含んだ心地よい風が車内に広がる。今年の五月に開通したばかりの真新しい黎明トンネルを抜けると羽島に到着する。途中の海岸では、程よい波に誘われたサーファーが、こぞって技を磨いている。休日には、家族連れやライダーが、風光明媚な景色を求め、羽島に集う。

羽島小学校は、明治十二年に「羽島小學」として創設され、今年で一四一年目を迎えている。

児童数は、昭和三十四年の八一四名をピークに年々減少し、今年度は五十二名七学級となっている。隣接している羽島中学校と一小一中で、児童生徒の交流学習や交流活動、先生方の乗入授業などの小中一貫教育に、熱心に取り組んでいる。また、学校応援団に支えられた様々な体験活動も充実している。

題名に「黎明の地」と書いたが、私たちの羽島は、今から遡ること約百五十年前に、十九名の若き薩摩藩士がひそかに英国へと旅立った地である。学校のすぐ近くには、薩摩藩英国留學生記念館があり、その足跡や功績を今に伝えている。ご存じの方も多いと思うが、鹿児島中央駅前にある「若き薩摩の群像」の十九名がその留學生である。

彼らは薩摩藩の命を受け、一八六五年四月英国へと旅立った。幕命以外は海外渡航を禁じられていた中での出発であった。また未知の外国の地ということもあり、「もう二度と薩摩の地は踏めないかもしれない。」そういう思いを胸に相当な覚悟をもって旅立ったに違いない。その若者たちは、のちの日本の発展に大きく寄与することとなる。

初代文部大臣 森有礼。大阪商工会議所初代会頭 五代友厚。東京開成学校(東京大学の前身)初代校長 畠山義成。東京国立博物館初代

館長 町田久成。開拓使札幌麦酒醸造所(サッポロビールの前身)の建設に尽力した村橋久成。カリフォルニアでワイン醸造を成功させた長澤鼎。彼らは世界で何を見、何を聞き、どんなことを考えたのだろうか。

先日、テレビにも出演する有名な歴史学の先生と話をする機会があった。先生はこう語った。「私は関西出身ですが、この薩摩が大好きです。薩摩には、この日本を動かした偉人がたくさんいます。『泣こかい飛ばかい。泣こよか、ひつ飛ば。』というよい言葉が鹿児島にはありますよね。先人のように、もっともっと鹿児島の子どもたちに活躍してほしいと思っています。』

羽島から世界に「ひつ飛んだ」十九名の若き志士。自然豊かな羽島を愛しみつつ、自分の可能性にどんどん挑戦し、いろいろな世界に「ひつ飛ばる」子どもたちを育成するため、日々授業改善を行い、新型コロナウイルスに負けず様々な体験活動を充実させていきたい。

最後に、本校区では、県無形民俗文化財に指定されている「太郎太郎祭り」が毎年旧暦二月四日に行われる。「漁撈と農耕」二つの予祝儀札を同時に行う珍しい祭りである。海も里も魅力的なこの黎明の地羽島に、今日も子どもたちの元気な声がこだまします。

## 総務部だより

総務部は、四月二十二日の定期総会（書面開催）を通して承認された活動方針や活動内容に基づいて活動している。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策（以下、コロナ対策）のため、実際に集まって検討する機会が少なくなっている（書面検討で実施）が、活動の一部を紹介する。

### 一 地区校長会との連絡会

本年度も、夏季休業中を中心に、各地区校長会との連絡会を実施した（大島地区はWeb会議）。連絡会では、文科省の関連事業の紹介、連合校長協会の活動報告、地区の現状や課題等の説明、意見交換など、充実した情報交換ができ、連携を深めるよい機会となった。各地区で話題になった主な内容は次のとおりである。

#### (一) コロナ対策に係る学校行事等の持ち方

- ア 市町村による対応の違い（学校裁量や一定の基準を設けた開催）
- イ 三密を避けた安全面に配慮した実施
- ウ 今後の状況や保護者の意見等を踏まえた修学旅行の実施
- エ 文科省の補習等のための指導員等派遣事業の概要
- (二) GIGAスクール構想への対応
  - ア 文科省のGIGAスクール構想の概要
  - イ 市町村による環境整備状況の違い
  - ウ 研究指定で取り組んでいる学校
- (三) 学力向上のための手立て
  - ア 学校の実状を踏まえた学力向上Web

#### (四)

システムの捉え方と活用の在り方  
改正給特法の施行

本年度から施行されている在校時間の上限と次年度から施行される変形労働時間制の活用

### 二 教育関係機関・諸団体との連携

七月二日に予定していた第一回県教委との懇談会は、コロナ対策のため中止となった。これまでに県PTA連合会との連絡会を行った。今後は、県教頭会、県教委との連絡会を行う予定である。

#### (一) 県PTA連合会との連絡会

- ア コロナ対策のための設備・備品・消耗品など、行政からの予算的支援状況
- ↓ 高校は予算執行の段階、小中学校は今後
- イ コロナ対策としてのPTAへのお願い
  - ↓ 毎朝の健康チェック（体温の計測等）
  - ↓ メディア依存の予防（ルールづくり）
  - ↓ 家庭内感染の予防（最大限の注意を）
  - ↓ 感染が発生した場合の冷静な対応
- ウ 学校行事等の変更・縮小への理解
- ↓ 休校による授業の補充等の対応状況
- ↓ 授業時数が不足する教科の補充
- ↓ 休校分は行事等の変更で対応可能
- ↓ 二期の先取り授業の実施
- ↓ オンラインの授業の工夫を検討（高校）→必修の教科の時は確保できていく状況
- エ コロナ対策に係る学校の連絡等の徹底
- ↓ 安心メールや文書で確実に届いている状況

オ コロナ対策に係る保護者の意識の共有

↓ 「今年は仕方ない」という意識

↓ 安心して、落ち着くためにあるPTA子どもたちだけの行事実施もあり得ること

### 三 教育予算等に関する要望

各地区からの要望を取りまとめ、七月十五日の庶務担当者会で原案を作成した後、七月二十九日の総務部会（書面）で審議し、八月十八日の常任委員会（書面）で承認された。今後は、十月二十七日に人事・給与部と合同で県教委への要望の会を開催する予定である。

### 四 総務部会

六月と七月に予定していた総務部会は、コロナ対策のために紙面で行わざるを得なかった。総務部会は、各校種部会長からの情報提供や各地区校長会の現状と課題について意見交換を行う貴重な場である。コロナ対策で集まることができない状況を少しでも克服するために、各市町村校長会の活動状況を把握するとともに、各地区からの「学校予算に関する要望事項」を庶務担当者会で詳細な検討を行い、役員会での意見等も踏まえ、県教委への要望事項及び市町村教委への情報提供に整理することできた。各地区の願いや懸案事項を網羅できたものと考えている。

今後も諸団体や各地区及び市町村校長会との連携を深め、学校経営上の緊要な課題に対処するための活動の充実に努めていきたい。

\*\*\* こころの詩 \*\*\*

蜻蛉に寄す

あんまり晴れてる 秋の空  
赤い蜻蛉が 飛んでゐる  
淡い夕陽を 浴びながら  
僕は野原に 立つてゐる

遠くに工場の 煙突が  
夕陽にかすんで みえてゐる  
大きな溜息 一つついて  
僕は蹲んで 石を拾ふ

その石くれの 冷たさが  
漸く手中で ぬくもると  
僕は放して 今度は草を  
夕陽を浴びてる 草を抜く

抜かれた草は 土の上で  
ほのかほのかに 萎えてゆく  
遠くに工場の 煙突は  
夕陽に霞んで みえてゐる

中原中也

一般財団法人校長会館だより

校長異動

○新任 令和二年八月二十五日付

薩摩川内市立樋脇中学校長

川池 省三氏

○新任 令和二年九月一日付

鹿児島市立桜洲小学校長

松田 博宣氏

○新任 令和二年九月一日付

三島村立三島硫黄島学園校長

石岡 秀久氏

(前松原なぎさ小学校教頭)  
ツ大会局総務企画課専門員

○新任 令和二年九月一日付

霧島市立永水小学校長

前田 博王氏

○転任 令和二年八月二十五日付

霧島市立国分中学校長

小牟禮 勉氏

(前樋脇中学校)

○転任 令和二年九月一日付

鹿児島市立城南小学校長

高山 謙一氏

(前桜洲小学校)

編集

後記



今年、ほとんどの学校で一学期が延長されました。新型コロナウイルス感染症に加えて、例年よりも梅雨明けが遅く、高温の日が続いたため、生徒の体調管理、熱中症等、心配されたことと思います。  
さて、九月に入って学校が始まり、感染防止の対策を行いながら、工夫した体育大会や運動会等に取り組んでいることと思います。今後も先行きが不透明で先の見通しが立たない状況であり、さらにインフルエンザの流行も予想されます。学校においても、最悪を想定した取組の必要性が言われています。しかし、そのようなことばかり考えていると、気持ちも沈み、表情も暗くなってしまうのではないだろうか。先日、本を読んでいると「いいことが起きたから笑顔になるのではなく、笑顔だからいいことが起きる。」とありました。いろいろと課題があり、悩むことはありますが、私たちは努めて笑顔で子どもや保護者、教職員等と接することが大切だと思います。初めのことと対応に苦慮することもあります。が、お互いに知恵を出し合い、情報を共有しながら、時には励まし合い、気力を振り絞って、元氣よく学校経営に取り組んでいきたいと考えています。  
最後に御多用の中、原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にご心から厚くお礼申し上げます。  
(天保山中 大平公明)